

京都大学言語学懇話会
2024 年度 発表要旨

例会報告

第 123 回例会

日時・場所 2024 年 4 月 13 日（土） 13:30 ～ 16:45 於 文学部校舎第 1 講義室

発表題目 シンハラ口語の前鼻音化閉鎖音について
ドゥリニ ディルシャーラー ジャヤスーリヤ
チベット系諸言語におけるわたり音 r の音節構造に対する影響
鈴木 博之（京都大学国際高等教育院非常勤）

第 124 回例会

日時・場所 2024 年 7 月 20 日（土） 13:30 ～ 16:45 於 Zoom

発表題目 時間的遠近の言語学的位置づけ
川畑 祐貴（京都大学大学院）
ドホイ語の代名詞拘束形をめぐる共時的・通時的諸問題
稲垣 和也（南山大学）

第 125 回例会

日時・場所 2024 年 12 月 8 日（土） 13:30 ～ 16:45 於 京都大学総合研究 2 号館第 8 講義室

発表題目 母音の延伸に対する多角的接近
韓 旼池（京都大学大学院／国立障害者リハビリテーションセンター研究所）
チベットの牧畜文化を記述する
海老原 志穂（京都大学白眉センター）

シンハラ口語の前鼻音化閉鎖音について

ドゥリニ デイルシャーラー ジャヤスーリヤ

シンハラ語の前鼻音化閉鎖音の扱い方には定説がなく、子音結合であるという立場をとる研究者 (Coates and De Silva 1960, Feinstein 1977, 1979, Chandralal 2010) や 1 単位であるという立場をとる研究者 (Disanayaka 1994, Geiger 1995, Gair 1998, Gair and Paolillo 1997) がいる。また、前鼻音化閉鎖音は子音結合ではなく、複合分節音であり、音素として立てる必要があるという研究者 (Letterman 1997) もいる。

通時的背景からは、前鼻音化閉鎖音という類が紀元後 2 世紀から 4 世紀にかけての段階で初めてシンハラ語の音素目録に加わり、紀元後 8 世紀頃から、語末で対応する鼻音と交替する現象や前鼻音化閉鎖音の重子音化 (鼻音 + 閉鎖音) が見られたようである Karunatilake (2001)。共時的には、前鼻音化閉鎖音はそれに対応する鼻音と有声閉鎖音結合、そして単独の閉鎖音、鼻音 (/m, n/のみ)と対立的に分布している。出現する位置は、音節の頭子音と語中のみである。シンハラ語彙では、*thathsama* 語彙において鼻音と閉鎖音の子音結合が見られ、*thadbhawa* 語彙では、鼻音と閉鎖音の結合の代わりに前鼻音化閉鎖音が対応する。

先行研究における子音結合仮説の主な論点として 1. 前鼻音化閉鎖音は特殊な結合ではなく、語頭の頭子音結合と同類であること、2. 通常の鼻音と同様に機能し、鼻音と弁別不可能であること、3. 表層では一単位として振る舞うにも関わらず、基底では子音結合であることが挙げられる。

それに対し、本発表では発表者が次のように子音結合仮説の欠点を指摘し、前鼻音化閉鎖音は一単位として認めることの妥当性を示した。前鼻音化閉鎖音が語中で前部要素が長くないまま出現し、鼻音要素と閉鎖音要素の聞こえ度がその他の頭子音結合と逆順である。そして、決して他の要素が介入しないことからその他の頭子音結合と共通しない。また、前鼻音化閉鎖音は鼻音と同じく語末で中和するものではなく、一度語末で対応する鼻音と交替し、二次的に中和の対象になるため、鼻音と弁別するのに疑問が生じない。そして、基底の前鼻音化閉鎖音は音韻規則により、表層において鼻音と有声閉鎖音の結合として現れる派生過程を示し、基底でも存在することを明確にした。

(どうりに でいるしゃーらー ジャヤすーりや)

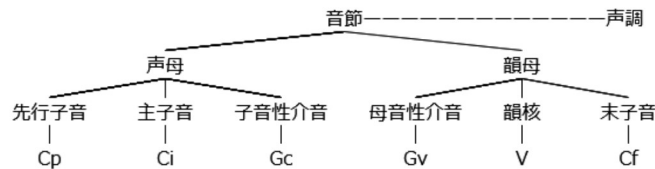
チベット系諸言語におけるわたり音 r の音節構造に対する影響

鈴木 博之

本発表では、チベット系諸言語（Tibetic；チベット・ビルマ語派）における、チベット文語形式のわたり音位置に現れる r の反映形を、主に発表者が直接フィールドワークを通じて得た一次資料に基づいて、音節構造の枠組みから分析した。内容としては、大きく次の 3 点を扱った。

- (1) チベット系諸言語、特に東チベットで話される諸変種について、わたり音位置に現れる r の現代諸言語における反映形の整理
- (2) チベット系諸言語の音節構造におけるわたり音のスロットに子音的なものと母音的なものの 2 種があることの提案（下図）
- (3) 子音的わたり音のスロットにある r は、諸条件を満たしたとき rhotic の性質を獲得し、母音自身の音変化を引き起こすこと

まず(1)については、大きく「わたり音 r の留保」「そり舌初頭子音の形成」「非そり舌初頭子音の形成」「rhotic の性質を持つ母音形式」の 4 つの類型に整理した。これらの音対応を包括的に説明するチベット系諸言語共通の枠組みとして、次の音節構造を提案した：



わたり音位置の r は、この中の「子音性介音」に配置される。この r は留保される場合を除いて、まず声母の内部で主子音に作用し、そり舌初頭子音や非そり舌初頭子音を形成する。一方、留保した r および主子音位置にある r が母音と接続したとき、r が rhotic の性質（F3 の有意な下降）を反映して子音としての調音を失いつつ声母から韻母の単方向に作用し、母音がそり舌化・軟口蓋化・咽頭化などの調音音声学的特徴を獲得する過程を示した。また、末子音に r が現れる事例も検討し、韻母内部で母音にのみ影響することを示した。このことから、韻母に配置される r は声母に影響を与える事例がないといえる。

本発表では、以上に記述した現象がチベット・ビルマ諸語やシナ・チベット諸語においてどのような展開が可能かという点もあわせて簡潔に言及した。

（すずき ひろゆき）

時間的遠近の言語学的位置づけ

川畑 祐貴

時間的遠近 (temporal remoteness) とは、事態の時間的位置に関する遠近評価のことを指すが、そうした遠近評価に関する言語学的関心は主に文法記述における実際的な要請のなかで生じてきた。すなわち、時間的遠近を研究することは、文法的な時制形式で実現される時間的遠近を研究することを意味した。ただし、時間的遠近は、地域的限定性 (文法的な時制形式による実現が特定の地域の言語に集中・限定していること) やさまざまな意味的特徴などから、あくまでも時制研究における周辺の現象と見られてきた。分析や理論が精緻化され始めるのは 2000 年代以降である。文法形式における時間的遠近の研究がこの 20 余年でようやく本格化した中で、時間的遠近の語彙的表示に関する関心はいまだ無いに等しく、研究対象としての不均衡が見られる。発表者はこの現状を受け、韓国語を対象に、時間的遠近を表しうる実際の語彙形式を観察してみたところ、指摘されてこなかった現象や特徴が存在することに気付いた。

本発表では、韓国語の時間語彙・表現を対象に、これまでに気付いた現象や特徴を紹介し、時間的遠近の語彙的表示がどのような性質を持つのかを考えた。韓国語を対象言語とするのは、韓国語の時間語彙・表現には比較的豊富な意味的、形態統語的バリエーションが見られ、時間的意味の実例や類型の収集に適しているためである。

具体的には、時間的遠近の表示方法や、遠近明示性と直示との関わり、程度性や強調との関わり、範疇横断性、概念的多様性という観点から述べた。

まず、時間的な近さを表す時間副詞は複数ある中で、時間的遠さを表すものはほとんど見られない (時間副詞体系における遠近の非対称性)。その代わりに、時間的な長さに関するアスペクト的表現が (非) 直示的な時間的遠さの表示を担うことがある。なお、こうした時間性とアスペクト性の交わりは「遠さ」の表現に限定されるものではなく、「近さ」の表現にも見られる (時間性とアスペクト性の範疇横断的性質)。次に、遠近明示的な形式は、直示的 (絶対時制的) な事態間関係だけでなく、照応的 (相対時制的) な事態間関係、動作様態的な事態内関係の表示にも使用されうる (遠近明示性と非直示性の関わり)。ほかにも、遠近明示的な形式は、空間表現や程度表現、用言形式などと意味的、概念的に関連しうる。時間的遠近の明示に特化した形式は共時的あるいは通時的にあまり多くないと思われる (時間的遠近の概念的多様性)。

(かわばた ゆうき)

ドホイ語の代名詞拘束形をめぐる共時的・通時的諸問題

稲垣 和也

インドネシア、カリマンタン中央部に分布するオーストロネシア諸語の一つ、ドホイ語 (ISO 639-3 [otd]; glottocode [otda1235]) には、1 人称単数の代名詞拘束形の異形態として接尾辞 *-k* と後接語 *=ku* があり、あたかも両者が二重標示されているように見える場合がある。例えば、副詞／助動詞の *harun*「新たに、初めて」の (語末の *n* が削除されて) 末尾に付加し、*haru-k=ku* [newly-1SG=1SG]「僕は初めて」となっているように見える。しかしながら、二重標示 (*-k=ku*) を支持する共時的・通時的根拠は極めて薄い。本発表では、Inagaki (2024: 63–64) で提示された通り、このような 1 人称単数の拘束形を *-k=ku* と見るのではなく、*-kku* という別の異形態と考える。したがって、上記の例は *haru-kku* [newly-1SG] と分析される。この分析は、1 人称単数属格形の同源形式 *-ŋku* (サンイル語、ンジャジュ語、ガヨ語、カロ・バタック語、古ジャワ語) や、Blust (1977: 10–11) らによる再建形 **ni-ku* によっても支持されるが、ドホイ語の共時的・通時的音韻論のみではその反映を跡付けることができない。*-kku* は **ni-ku* から何らかの形態音韻論的弱化を被ったと考えられる。

代名詞拘束形は、副詞／助動詞や接続詞に付加する場合、その節ドメインのコントローラーである主語が共起する場合がある。コントローラーが変われば拘束形も変わる (= 共变的である) ため、一致現象と考えられる (例: *ahku haru-kku soleng=ah* [1SG[SBJ] · newly-1SG · understand=3]「僕は初めてそれが分かった」)。ただし、拘束形が付加し得る要素は限られ、一律に起こるような一致現象ではなく、主語の生起も義務的ではない。さらに、句のドメインではコントローラーは生起不可能である。本発表では、Corbett (2006) の「標準的一致」を援用しつつ、一つの節内で二つの副詞／助動詞ないし接続詞に対して代名詞拘束形が多重生起する例を根拠として、ドホイ語の代名詞的一致標識がより「標準」に近いとする Inagaki (2024: 76) の主張を検討した。

参考文献

- Blust, Robert. 1977. The Proto-Austronesian pronouns and Austronesian subgrouping: A preliminary report. *University of Hawai'i Working Papers in Linguistics* 9. 1–15.
- Corbett, Greville G. 2006. *Agreement* (Cambridge Textbooks in Linguistics). Cambridge: Cambridge University Press.
- Inagaki, Kazuya. 2024. Bound pronominals in West Barito languages. *NUSA: Linguistic Studies of Languages in and around Indonesia* 76: 51–80.

(いながき かずや)

母音の延伸に対する多角的接近

韓 旼池

母音の延伸は、通常より母音の時間長が長くなる現象である。その判定には、話者の全般的な発話時間長（引いては発話速度）が伸縮するため、客観的な物理量による基準を設けることが難しく、現在は人の主観に頼ることが多い。意識的・無意識的、流暢・非流暢、自然・不自然と、母音の延伸は言語コミュニケーションの中で様々な事情と姿で通言語的に頻出する。語義には影響しないため、付随的で余分なものと思われやすいが、文字言語で母音延伸を意図的に表記することを考えると、省略されてはならないコミュニケーションでの大事な意味合いを担っていることが分かる。なお、日本語社会の構成員の間で共有されている母音延伸の意味と形式的な規則が存在することがうかがえる。

本発表では、言語コミュニケーションにおける母音延伸の重要性と規則性を示しつつ、未解明な点が多いことを指摘した。また、母音延伸は言語コミュニケーションを構成する様々な物事と関わっているため、i) 言語のみならず多様な要素の観察が伴われるべきであることと、ii) 多様な分野からの研究に値する研究対象であることを、発表者のこれまでの研究（韓 2022、2023a、2023b、2024 及び未発表の研究・観察）を提示することで示した。主に『日本語日常会話コーパス』を用いている諸研究の具体的な提示内容は次のとおりである。

- 1) 表記、記号、音声、言語個別性と通言語性に関わり、母音延伸は語義に影響しない音声現象であるため正書法がないこと、日本語における母音延伸の表記法、母音延伸の音声と表記の不一致があり得ること
- 2) 話者のメタ情報（性別、年齢、心理指標）、品詞を活用した、統計分析による、日常会話での母音の延伸率と諸要素との相関
- 3) 対人関係、視線、ポライトネス、強調に関連し、実例観察による、強調の母音延伸の対人関係による生起制限
- 4) 音声、音韻、形態統語に関連し、母音延伸の語内における生起位置の決定要因と規則
- 5) 多様な母音延伸の種類または生起状況の紹介と、その判定の難しさ

（はん みんじ）

チベットの牧畜文化を記述する

海老原 志穂

本発表では、チベット高原で広く営まれる牧畜に関する文化語彙の記述言語学的研究について話した。発表ではまず、対象言語であるチベット諸語の特徴について概観し、日本におけるチベット語研究史を Ebihara (2024) にもとづき紹介したうえで、チベット東北部における牧畜文化語彙収集の共同研究と言語記述の具体例について述べた。

チベット高原では標高による生業の垂直分布が見られ、高地では、家畜を飼い、増やしながら、その乳や肉、毛、皮、糞などの資源を利用する生活が営まれている。チベット諸語ではこれらの牧畜生活を反映した語彙が顕著に発達している。発表者は 2014 年から、東北チベットにおける牧畜文化語彙収集の共同研究に参加し、現地調査で集めた牧畜に関わる語彙を文化項目別に整理し、『チベット牧畜文化辞典』(星他編 2020) の編纂を行なった。発表ではその中から、日なたと日かげによる山の斜面と草、ヤク糞の形状や加工法による名称の違い、そして、ヤクを識別する語彙体系の例を挙げた。ヤクの識別は、毛色、角の有無や形状、模様の他、その他属性 (成長段階・雌雄、役割、体の大きさ、性格、くせ、乳量等) を組み合わせて表す。発表者による参与観察とエリシテーションによると、同一の個体に対する識別表現は世帯内のメンバー間でも異なることや、同じ発話者でも場面によって異なることがわかった。また、共有場面においては「毛色の色彩語彙の語幹-角の有無」という短い表現が主に使用され、非共有場面において個体識別が必要となる際には、群れの中で相対的に区別が可能となる程度に各要素を組み合わせた名詞句で表現する傾向がある。実例の数が少ないため形態的、統語的な分析が十分ではないが、今後は内部の構成要素の構造や家畜の識別表現に特有の文法特徴にも注目していきたい。最後に、今後の展望として、チベット・ヒマラヤ地域の牧畜文化語彙を収集するための民俗語彙調査票の構想について述べた。

参考文献： Ebihara, Shiho (2024) The Historical Development of Tibetan Linguistics in Japan. Deroche, Marc-Henri, Takumi Ikeda, and Kazushi Iwao (eds.) *Cahiers d'Extrême-Asie* 33 (*Approaching the High Plateau from the Archipelago: Tibetan Studies in Japan*), EFEO: pp. 159-178. 星泉・海老原志穂・南太加・別所裕介 (編) (2020) 『チベット牧畜文化辞典(チベット語・日本語)』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

(えびはら しほ)